

大学生と母親の食ライフスタイルと親子関係の関連

目白大学人間学部 小野寺敦子
目白大学人間学部 河野 理恵

【要 約】

本研究では、大学生とその母親の食ライフスタイルと親子関係、母親自身が評価する養育態度および大学生の幸福感との関連性を明らかにすることを目的とした。母子双方からの回答が得られた中で、子どもが現在、家族と一緒に生活している223組を分析対象とした。まず「食行動と食意識」項目に対し因子分析をおこなったところ「健康的食事」「料理関心」「コンビニエンス」「家族と食事」「菓子と市販惣菜」の5因子を抽出した。大学生と母親の各5因子間の関連性を相関係数を求めて検討した結果、同一の家庭内における母親と大学生は類似した食意識と食行動をとる傾向がみられた。次にこれら5因子に基づきクラスタ分析を行ったところ、大学生と母親共に「理想的食ライフスタイル」「ソト食ライフスタイル」「食無関心ライフスタイル」が導かれたが、大学生では「ウチ食ライフスタイル」母親では「食きまぐれライフスタイル」が導かれた。最後に多重コレスポネンス分析を実施した結果、「大学生理想的食」「母親理想的食」「父親信頼」「母親信頼」「バランス養育態度」「幸福感最高」が近くに布置された。

キーワード：大学生食ライフスタイル、親子関係、母親食ライフスタイル、
多重コレスポネンス分析、幸福感

問題

近年の日本社会では、母親が作った料理を家族そろって一緒に食べるという食事形態は減少し、孤食、個食、粉食、中食といった食事形態が増えてきていると考えられている。この日本における食事形態の変化の背景には、就労する母親の増加、コンビニエンスストアの普及といった社会的変化が影響を与えているといえよう。しかし伊東・竹内・鈴木(2007)は、家族での共食は「互いの存在を確認しながら楽しみを分かち合う場面であり子どもが社会を知る場」であると指摘し、安藤・山田(2004)は「家庭での食事を通して、子どもは基本的信頼感や安定感を育み、社会性や集団適応力を身につけてゆく」と指摘している。また児童虐待の世代間伝達を提起している渡辺(2000)は、「なごやかな食卓の団らんは家族が子どもの成

長を暖かく見守り滋養する機能を端的に表している」と述べ、親子の愛着形成の観点からも家族での食事は重要であると指摘している。

食に関する研究は、食生活の実態調査(例：山下・熊谷・青木, 2015)、食育に関する研究(例：藤原・宮本, 2010)、瘦身願望に関する研究(例：田崎, 2007; 鈴木, 2014)や食行動異常に関する研究(例：嘉手納・今井・嶋崎, 2004)、さらには食嗜好や食文化の世代間伝承に関する研究(例：塩谷, 2002)など多岐にわたっている。特に心理学の領域では家族との共食が子どもに与える影響を検討した研究が多い(伊東・竹内・鈴木, 2004・2007; 平井・岡本, 2003・2006)。たとえば平井・岡本(2006)は、過去の家庭における食事場面の「雰囲気良さ」が大学生となった現在の父子・母子の心理的結合性を強めると報告している。しかし井

上・宮崎（2013）は、家族での共食が常に子どもの精神的健康に良い影響を与えているわけではなく、親子間の心理的距離が大きい家族では共食が子どもにとって精神的負担になっている場合があると指摘している。すなわち家族で共に食べることが重要なのではなく、その食卓の雰囲気子どもが子どもの心身の発達にとって重要であると考えられる。

海外における親子の食行動を扱った研究では、Fulkerson, Neumark-Sztainer & Story（2006）による家族での共食が家族の凝集性を高めるのに有効であることを報告した研究、Neumark-Sztainer, Wall, Story & Fulkerson（2004）やScaglioni, Salvioni & Galimberti（2008）による親の食事に対する態度が子どもの食行動に与える影響を検討した研究などがある。また Ventura & Birch（2008）は親の養育態度が子どもの食行動と肥満に与える影響を検討し Boutelle, Fulkerson, Neumark-Sztainer, Story & French（2007）は親がファーストフードを購入する割合が高いほど、子どももファーストフードや塩分の高いスナック菓子を購入する傾向が高く野菜の摂取量が少ないことを指摘している。

近年、ライフスタイルという言葉をよく耳にするようになった。井関（1979）は、ライフスタイルとは「生活課題の解決および充足の仕方」であり、「財・サービス、情報、機会（生活資源）の組み合わせの選択という形で示される」と定義している。この定義を食行動にあてはめてみると、食べる行為にいくらお金をかけ（財）、誰が作った料理を何処で誰と食べ（サービスや機会）、生きるのに不可欠な食を充足させているのかを食ライフスタイルと考えることができる。つまり食ライフスタイルには、価値観（生き方やお金に対する考え）そして親子関係を含めた対人関係が反映されていると考えられる。食ライフスタイルの研究では、飽戸（1992）が東京、ニューヨーク、パリの3都市の食ライフスタイルを検討し、東京では「食質素型」「酒嗜好型」「食健全型」「料・グルメ型」「料・健全型」「不摂生型」の6つの食ライフスタイルを導きだしている。また小林（2011）は、ライフスタイル（年齢・学歴・既婚/未婚・

収入）によって食生活の外部化がどのように異なるかを検討し、高野・野内・高野・小嶋・佐藤（2009）は、4つの食生活スタイルの型（食品の安全性軽視型、規律重視・ストレス回避行動低頻度型、雰囲気軽視型、ストレス回避行動高頻度型）を導き出している。

以上の食事についての内外の先行研究から、家族での共食が良好な親子関係を築くのに重要な要因であることが明らかにされているが、ファーストフードの利用頻度や間食なども含めた食行動全体をとらえた尺度を使用している研究は少なかった。さらにこれらの先行研究の研究対象の多くは、大学生の子どもが評価する食事と親子関係にとどまっている。

そこで本研究では子どもである大学生のみならず、その母親に対してもアンケート調査を実施し、親子の食事行動や食意識の一致度や差異を食ライフスタイルという観点から明らかにし、その食ライフスタイルが両者の親子関係とどのように関連しているかを検討することを目的とする。親子関係についても、大学生の子どもがとらえる親との関係性のみならず、母親自身がどのような養育態度を子どもにとってきたかの評価を明らかにする。また、親子関係が良好な場合、子ども自身の心の状態は安定していると考え、その状態を幸福感という視点から検討する。さらに本研究では、食行動と食意識尺度より得られた結果にもとづき、大学生と母親の食ライフスタイルを別々に導き出し、これらと親子関係および養育態度さらには現代の大学生の幸福感とがどのように関連しているかを多重コレスポネンズ分析によって検討する。ここでは、コンビニやファーストフードの利用度が低く、栄養バランスの良い料理を家族で一緒に食べる食ライフスタイルを母親も子どももとっている場合、親子関係は良好であり大学生の幸福感も高い、逆にファーストフードなどの利用が多く栄養バランスが悪い食ライフスタイルをとる親子の関係性は不良であり幸福感も低いという仮説を立てて検証することにする。

方法

調査対象者 都内の2つの私立大学に依頼し大学生688名に対し大学生用質問紙、母親用質問

紙、切手を貼った返信用封筒（母親用）をA4版の封筒に入れ配布した（両方の質問紙に同じ番号を記入し、返信後同一の親子データであることを照合できるようにした）。大学生への調査実施時には、本調査は、無記名であること、調査への参加および回答は強制されるものではないこと、個人の回答のデータ保存と処分は厳重に保護されていることなど、調査倫理にかかわる事項について丁寧に説明を行った。次に郵送のためだけに母親の住所・氏名を使用することを大学生に説明し、同意を得られた場合、封筒の表に母親の住所・氏名を記入してもらい調査用紙（倫理事項について記載）を同封して郵送した（688名の大学生に配布し回収率は62.6%であった）。431名の母親に発送したが、母親からの返却は255名からであった（回収率59.2%）。しかし1名が父親からの回答であったため、254組の大学生とその母親が番号によって照合できた。また本研究では現在の家族における日々の食生活と親子関係について検討することを目的としているため、親元から離れて生活している一人暮らしの大学生（31名）とその母親のデータは分析から除き、家族と一緒に生活している223組を分析対象者とした（息子と母親58組・娘と母親165組）。大学生の平均年齢は20.22歳（SD = 1.45）、母親の平均年齢は50.80歳（SD = 4.28）であった。

分析内容 (a) 食行動と食意識項目：河野・渋谷・小野寺・西川（2012）の12項目からなる「食ライフスタイル尺度」から8項目、さらに独自に家族との食事に関する3項目、野菜や甘いものを食べる頻度を尋ねた7項目、合計18項目を大学生と母親に対し共に設定した。(b) 大学生の子どもが評価する父親/母親との関係についてそれぞれ10項目を独自に設定した（例：父親/母親と私は意見が対立する。誰よりも父親/母親を頼りにしている）。(c) 母親の養育態度14項目：Baumrind（1973）の応答性と要求性の考え方を参考に、「統制」と「放任」という2つの視点から項目を設定した。子どもの行動を統制する養育態度7項目（例：子どもの言い訳を認めないできた）と自由・放任主義的な養育態度7項目（例：子どもが食べ残してもうるさく言わないできた）(d) 大学生に現在の生活の

幸福度を尋ねる目的で「現在、幸福であると思う」という設問を設定した。(a) から (d) に対しては「全くそうではない」1点、「あまりそうではない」2点、「かなりそうである」3点、「非常にそうである」4点の4段階評定で回答を求めた。フェイスシートとして大学生に対して年齢・性別・居住形態（1人暮らしか家族と同居）を設定し、母親には年齢を尋ねた。調査時期：2013年11月—2014年3月。

結果

「食行動と食意識」項目の因子分析結果：「食行動と食意識」の18項目の平均値と標準偏差を大学生と母親で別々に求め、天井効果とフロア効果が生じてないことを確認した。次に大学生と母親の回答を合わせて因子分析（主因子法・promax回転）を行い5因子を抽出した（Table 1）。第1因子は「毎日の食事は栄養のバランスがとれている」等の3項目で因子負荷量が高く「健康的食事」因子と命名し、第2因子は「得意な料理がある」等の4項目で因子負荷量が高く「料理関心」因子と命名した。第3因子は「コンビニ等でお弁当やおにぎりを買う」等の4項目で因子負荷量が高く「コンビニエンス」因子、第4因子は「夕食は家族と一緒にする」等の3項目で因子負荷量が高く「家族と食事」因子とした。第5因子は「スナック菓子を食べる」「食事に惣菜を買ってくる」等の4項目で因子負荷量が高く「菓子と市販惣菜」因子とした。そして各因子で因子負荷量が高かった項目の素点を合計し項目数で割り下位尺度を算出した。下位尺度の内的一貫性を検討するために α 係数を算出し、第1因子 $\alpha = .84$ 第2因子 $\alpha = .73$ 第3因子 $\alpha = .74$ 第4因子 $\alpha = .75$ 第5因子 $\alpha = .62$ という数値が得られた。5つの下位尺度得点が男性（58名）女性（165名）で異なるかをt検定により検討したが、男女差は見られなかったため、その後の分析は男女を分けずに進めた。

父親/母親との関係性・母親の養育態度の因子分析結果：大学生からみた父親・母親との関係性を尋ねた10項目の平均値と標準偏差（SD）を求め、天井効果とフロア効果が生じていないことを確認後、父母両方のデータを合わせて因子分析（主因子法・promax回転）を実施し4因子

Table 1 「食行動と食意識」尺度の因子分析結果 (主因子法・Promax 回転後)

項目	F1	F2	F3	F4	F5
第1因子「健康的食事」($\alpha = .81$)					
毎日の食事は栄養のバランスがとれている	.94	-.00	.06	.02	-.01
健康的な食生活をしている	.88	-.01	.05	.00	-.01
毎日、野菜を食べている	.63	.04	-.08	.00	.04
第2因子「料理関心」($\alpha = .73$)					
料理をすることは楽しい	.02	.82	-.03	.00	-.03
得意な料理がある	-.03	.74	-.06	-.05	-.04
親から教わった料理を作る	-.03	.63	.10	.11	.05
料理本や料理番組を見て料理を作る	.07	.59	-.00	-.07	.12
第3因子「コンビニエンス」($\alpha = .74$)					
ファーストフードを利用している	-.06	-.04	.79	.07	.01
外で食事をする	-.01	.09	.68	-.08	-.03
コンビニ等でお弁当やおにぎりを買う	-.04	-.07	.62	-.08	.08
すしやピザなどのデリバリー (出前) を頼む	.11	.04	.58	.08	-.04
第4因子「家族と食事」($\alpha = .75$)					
夕食は家族と一緒にする (していた)	.08	-.07	-.11	.72	.10
家族がいても1人1人別々に食事をする (逆転)	.01	.04	.04	-.69	.04
家族で食事中、会話をする	-.03	.10	.19	.69	-.05
第5因子「菓子と市販惣菜」($\alpha = .62$)					
スナック菓子を食べる	-.18	.08	-.02	.09	.58
ケーキや和菓子などの甘いものを食べる	.08	.14	-.10	.01	.57
食事に冷凍食品を使う	.05	-.07	.08	-.09	.51
食事に惣菜を買ってくる	.04	-.09	.09	-.02	.50
因子間相関					
	第1因子	—	.39	-.48	.50
	第2因子		—	-.28	.40
	第3因子			—	-.28
	第4因子				—
	第5因子				—

が得られた。第1因子では「母親のことをうっとうしく思う」(以下に因子負荷量を示す)(.92)「母親と私はわかり合えない部分がある」(.81)「母親と私は言い争いをすることがある」(.78)「母親といるとイライラしてくる」(.75)「母親と私は意見が対立する」(.70)「母親と私は価値観が違う」(.55)の6項目で因子負荷量が高かったため「母親との対立」因子と命名した(α 係数=.87)。第2因子では母親の第1因子と同じ内容項目(母親を父親に置き換え評定した項目)で因子負荷量が高かったため「父親との対立」因子($\alpha = .87$)とした。第3因子で

は「何か重要な決定をする時には父親に意見を求める」(.84)「心配事があると父親にまず相談する」(.81)「父親は私の心の支えである」(.80)「何か重要な決定をする時には父親に意見を求める」(.63)の4項目で因子負荷量が高かったため「父親への信頼」因子とした($\alpha = .84$)。そして第4因子では第3因子の「父親への信頼」と同じ項目(父親を母親に置き換え評定した項目)で因子負荷量が高かったため「母親への信頼」因子($\alpha = .84$)と命名した。

次に母親の養育態度14項目の平均値と標準偏差(SD)を求め、天井効果とフロア効果をも

Table 2 大学生と母親の「食行動と食意識」下位尺度間の関連（相関係数を示す）

	大学生 健康的食事	大学生 料理関心	大学生 コンビニ	大学生 家族と食事	大学生 菓子と市販惣菜
母親健康的食事	.37***	.16*	-.14*	.26**	-.20*
母親料理関心	.07	.18*	-.11	.08	-.14*
母親コンビニ	-.17*	-.13	.32***	-.09	.08
母親家族と食事	-.18*	.22***	-.16*	.40***	-.11
母親菓子と市販惣菜	-.01	-.11	.08	-.04	.20**

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

確認後、因子分析（主因子法・promax回転）を実施し2因子が抽出された。そして因子負荷量が低かった2項目を除き再度12項目で因子分析を実施し2因子を抽出した。第1因子は「子どものわがままを聞き入れてきた」(.74)「子どもがほしがる物があれば買ってあげてきた」(.68)「子どもが嫌がることは無理やりさせないできた」(.55)「子どもには好きなだけテレビやビデオを見せてきた」(.53)「子どもが食べ残してもうるさく言わないできた」(.47)「子どものやりたいこと、したいことを優先させてきた」(.40)「子どもの寝る時間はその日によってちがっていた」(.33)の7項目で因子負荷量が高く「自由・放任」因子と命名した($\alpha=.72$)。第2因子では「あれはだめ・これはいけないと

禁止してきた」(.71)「親は怖いと子どもに思わせるようにしてきた」(.63)「子どもに〇〇しなさいなどと命令口調で話した」(.59)「子どもを叱る時、たたいてしまうことがあった」(.55)「子どもの言い訳を認めないできた」(.46)の5項目で因子負荷量が高かったので「統制」因子と命名した($\alpha=.72$)。

下位尺度間の関連性：大学生と母親の「食行動と食意識」がどのように関連しているかを各5因子の下位尺度得点（各因子で負荷量の高かった項目の素点を合計し項目数で割って算出）を求め相関係数を算出した(Table 2)。その結果、大学生と母親の全ての下位尺度得点間において有意な正の相関係数が得られた。大学生の「健康的食事」得点が高いほど母親の「健康的食事」

Table 3 「食行動と食意識」下位尺度と父母への信頼・対立意識・養育態度・幸福感との関連（相関係数を示す）

	父親への 信頼	父親との 対立	母親への 信頼	母親との 対立	母親 「統制」	母親 「自由・放任」	大学生 幸福感
母親健康的食事	.12	-.11	.10	-.10	.02	-.14*	.09
母親料理関心	.01	.13	-.01	.14*	.16*	-.12	-.06
母親コンビニ	-.03	-.00	.08	.00	-.08	.25***	-.00
母親家族と食事	.19**	-.21**	.22***	-.20**	-.02	-.20**	.20**
母親菓子と市販惣菜	-.17	-.10	.04	-.11	-.02	.31***	-.02
母親「統制」	-.02	.21**	-.03	.21**			
母親「自由・放任」	.00	-.01	-.07	-.01			
大学生健康的食事	.21**	-.15*	.23***	-.15*	.10	-.03	.21**
大学生料理関心	.17*	-.01	.15*	-.02	.04	-.17*	.06
大学生コンビニ	.02	.05	.07	.07	.03	-.10	-.03
大学生家族と食事	.39***	-.39***	.40***	-.37***	.07	-.13	.28***
大学生菓子と市販惣菜	-.03	.14*	.04	.13	-.02	.05	-.10
大学生幸福感	.33***	-.50***	.33***	-.48***			

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

得点も高く、大学生の「コンビニエンス」得点が高いと母親の「コンビニエンス」得点が高かった。また「菓子と市販惣菜」においても同様の傾向が認められた。大学生の「食行動と食意識」と母親自身の「食行動と食意識」とは5側面全てにおいて関連していることが示された。

父親/母親への「信頼」得点「対立」得点と「食行動と食意識」の下位尺度得点および養育態度得点との関連性を検討した。その結果、「大学生家族で食事」「大学生健康的食事」と「母親家族と食事」は、「母親への信頼」「父親への信頼」との間に有意な正の相関係数が、「母親との対立」「父親との対立」との間には負の有意な相関係数が得られた。この結果、家族で一緒に会話をしながら、健康的食事をしている家庭では、子どもは両親への信頼感を高める傾向が認められた。また「母親との対立」「父親との対立」と「統制」との間には有意な正の相関係数が得られており、母親に否定的な感情を強く抱く大学生の母親は、厳格で統制的な養育態度をとる傾向がみられた。一方、自由で放任主義な養育態度をとる母親は、コンビニやファーストフードの利用度が高く、菓子や市販惣菜を多く食べ、家族と一緒に食事することが少ないという傾向が見られた。「幸福感」は、「大学生健康的食事」「大学生家族と食事」「母親への信頼」「父親への信頼」との間には正の有意な相関が、「母親との対立」「父親との対立」との間には負の有意な相関係数が得られた。両親と良好な関係であることそして家族で健康的食事をする事が、大学生の幸福感とも関連していることが示唆された。

食ライフスタイル・父母関係および養育態度の分類：大学生と母親の「食行動と食意識」、大学生からみた父母との関係および母親の養育態度をそれぞれいくつかの特徴をもった群に分類するために、各尺度の因子得点を用いてK-means法によるクラスター分析を行ったところ各尺度とも4クラスターずつ得られた。大学生の食ライフスタイルとして得られた4クラスターを独立変数、大学生の「食行動と食意識」尺度の5つの下位尺度得点の平均値を従属変数とした1要因の分散分析を実施したところ、全ての下位尺度において群の効果が有意であった。Duncan法

による多重比較を実施したところ0.1%水準で有意な差が認められた (Table4)。この多重比較の結果をふまえ、クラスター得点の高低により次のように解釈し命名した (この手続きを父母との関係分類と養育態度分類においても行った)。第1クラスターは「健康的食事」と「家族と食事」が一番低く、「料理関心」も3番目に低かったが「菓子と市販惣菜」と「コンビニエンス」が比較的高かったため「大学生食無関心」型 (52名) と命名した。第2クラスターは「料理関心」が一番低いが「健康的食事」と「家族と食事」が比較的高かった。料理への関心は低いが栄養バランスのとれた健康的食事を家でする傾向が強いことから「大学生ウチ食」型 (36名) とした。第3クラスターは「コンビニエンス」と「菓子と市販惣菜」が他のクラスター得点に比べ有意に高かったが、3つの下位尺度得点は比較的 low だった。本クラスターはコンビニやファーストフードをよく利用し外食することが多く、スナック菓子やケーキさらには惣菜も買って食べる傾向が強いことから「大学生ソト食」型 (60名) とした。最後に第4クラスターは「料理関心」「健康的食事」「家族と食事」が他のクラスターよりも高く、「コンビニエンス」と「菓子と市販惣菜」が低かった。このクラスターは健康的食事を心がけ家族とも食事を取り料理への関心が高く、コンビニやファーストフードの利用頻度および菓子や市販の惣菜を食べる頻度が他のクラスターに比べ低い傾向があった。このことから望ましい食生活を送っていると考えられるため「大学生理想的食」型 (65名) と命名した。

同様に母親の食行動・食意識の5因子の得点から4クラスターが得られた (Table 4)。母親の第1クラスターと第3クラスターの構成は大学生と類似していたため、第1クラスターを「母親食無関心」型 (34名)、第3クラスターを「母親ソト食」型 (30名) と命名した。また、大学生の第4クラスターの構成と母親の第2クラスターの構成も同じであったことから「母親理想的食」型 (70名) とした。しかし母親の第4クラスターでは、5つ全ての下位尺度得点が2番目の高さに位置する傾向が認められたので、本クラスターを「母親食きまぐれ」型 (76名) とした。この型は家で料理もするが、一方で簡便な食事や市販

Table 4 大学生と母親の食ライフスタイル別, 各因子項目得点の平均値 (SD) および分散分析結果

	第1クラスタ		第2クラスタ		第3クラスタ		第4クラスタ		F値	多重比較
	n	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)	n	平均値 (SD)		
健康的食事	a. 大学生	1.88 (.53)	b. 大学生ウチ食	3.22 (.57)	c. 大学生ソト食	2.64 (.67)	d. 大学生理想的食	3.00 (.65)	44.42***	b・d>c>a
	A. 母親	2.61 (.41)	B. 母親理想的食	3.59 (.37)	C. 母親ソト食	2.37 (.45)	D. 母親食さまぐれ	3.10 (.58)	96.30***	B>D>A>C
料理関心	a. 大学生	1.96 (.70)	b. 大学生	1.60 (.43)	c. 大学生	2.60 (.56)	d. 大学生	3.05 (.51)	66.62***	d>c>a>b
	A. 母親	2.43 (.48)	B. 母親	3.13 (.47)	C. 母親	2.20 (.51)	D. 母親	2.94 (.39)	40.61***	B・D>A>C
コンビニエンス	a. 大学生	2.65 (.58)	b. 大学生	2.16 (.52)	c. 大学生	2.91 (.50)	d. 大学生	2.03 (.46)	37.90***	c>a・b・d
	A. 母親	1.81 (.36)	B. 母親	1.52 (.37)	C. 母親	2.42 (.47)	D. 母親	2.04 (.36)	45.46***	C>D>A>B
家族と食事	a. 大学生	2.30 (.64)	b. 大学生	3.32 (.65)	c. 大学生	3.27 (.50)	d. 大学生	3.43 (.57)	42.52***	d・b・c>a
	A. 母親	2.85 (.46)	B. 母親	3.71 (.34)	C. 母親	3.13 (.58)	D. 母親	3.45 (.41)	35.68***	B>D>C>A
菓子と市販惣菜	a. 大学生	2.73 (.63)	b. 大学生	2.10 (.44)	c. 大学生	3.03 (.44)	d. 大学生	2.37 (.55)	29.00***	c>a>d>b
	A. 母親	2.35 (.34)	B. 母親	2.00 (.43)	C. 母親	2.95 (.32)	D. 母親	2.42 (.39)	44.77***	C>A・D>B

***p<.001

惣菜も積極的に利用している。つまりその日の都合や気分で食事を決めていると推察できる。

次に大学生からみた父母との関係についての4クラスについて述べる。これら4クラスについてDuncan法による多重比較を実施しすべての群間で0.1%水準で有意な差が認められた(「父親との対立」 F 値=20.49, 「父親への信頼」 F 値=218.20, 「母親との対立」 F 値=144.62, 「母親への信頼」 F 値=153.97)。この多重比較の結果をふまえ、得点の高低により子どもからみた父親との関係および母親との関係を次のように解釈し命名をした。父親の第1クラスと母親の第3クラスは、両得点が共に低かったため「父親と希薄」型(48名)「母親と希薄」型(38名)と命名した。父親の第2クラスと母親の第1クラスは「信頼」が高く「統制」が低かったため、「父親信頼」型(46名)「母親信頼」型(65名)とした。父親の第3クラスと母親の第4クラスは「統制」が高く「信頼」が最も低かったので、「父親と対立」型(57名)「母親と対立」型(42名)、そして父親の第4クラスと母親の第3クラスは、両得点が共に高かったことから「父親とアンビバレント」型(54名)「母親とアンビバレント」型(73名)と命名した。

つづいて母親の養育態度分類について述べる(Duncan法による多重比較を実施し両方の得点において0.1%水準で有意差が認められ、「自由・放任」 F 値=94.60, 「統制」 F 値=126.00であった)。この多重比較の結果をふまえてクラス得点の高低によって母親の養育態度の4つのクラスを次のように解釈し命名した。第1クラスでは「自由・放任」が高く「統制」が低かったため「自由・放任養育」型(37名)、第2クラスは両得点が共に高く「アンビバレント養育」型(66名)、第3クラスは「統制」が高く「自由・放任」が低いため「統制養育」型(52名)最後の第4クラスは両得点が共に低く、子どもに対し上手にかかわっていると考えられるため「バランス養育」型(64名)と命名した。**多重コレスポネンス分析結果**：クラス分析によって得られた大学生と母親の食ライフスタイル、父親・母親との関係、母親の養育態度および大学生の幸福感が相互にどのように関連しているかを明らかにする目的で多重コレスポネンス分析を実施した(Figure 1)。イナーシャ値は次元1が.34、次元2が.29であった。コレスポネンスの結果、「大学生食無関心」は「母親食無関心」「母親と対立」「父親と対立」「幸福最低」と近い布置を示していた。これは次

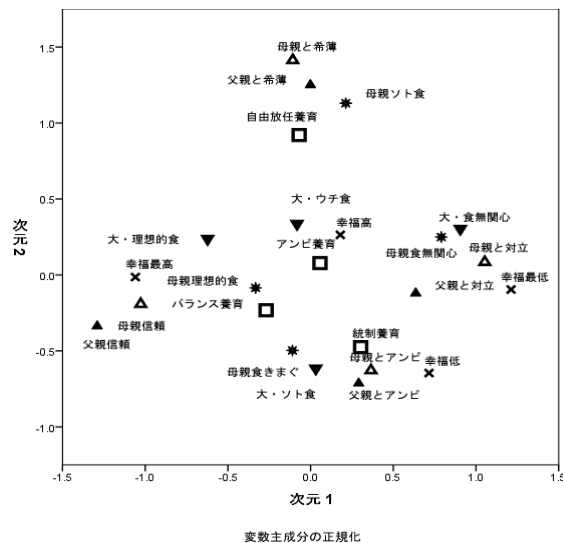


Figure 1. 大学生と母親の食ライフスタイルと親子関係・養育態度・幸福感の関連 (多重コレスポネンス分析結果)

元1では右側に行くほど子どもおよび母親の食ライフスタイル、親子関係のうちネガティブな要因が位置していることになる。それに対し次元1左側では「大学生理想的食」「母親理想的食」「父親信頼」「母親信頼」「バランス養育」「幸福最高」が近い布置にありポジティブな関連性が位置していた。「大学生理想的食」および「母親理想的食」は、料理や食への関心があり、家族と共に食事し健康的な食生活を送っていると自分の食事を評価する傾向がみられた。またこの型の大学生は父親および母親を信頼し良好な関係性であり、その場合の母親の養育態度はバランス型（統制しすぎず、放任すぎず上手にバランスよく子どもに接してきている）と推察された。こうした状況にある大学生の幸福感も非常に高いことが示唆された。それに対し、大学生および母親の「食無関心」は、父母と意見が対立しわかり合えないことがあることを示す「対立」と近い布置にあり、さらに大学生の幸福感が一番低い群との関係が推測された。これは食事に対して母親も子どもも関心が低い場合、親子関係が良好ではなく、大学生の幸福感も低くなることを示唆している。

次元2の視点からみると「母親ソト食」「母親と希薄」「父親と希薄」「自由・放任養育」が近い布置に置かれ、「大学生ソト食」「母親食きまぐれ」「母親とアンビバレント」「父親とアンビバレント」「統制養育」「幸福低」が近い布置にあった。また「大学生ウチ食」と「幸福感高」も近い位置に布置していた。親との関わりが希薄な関係は、母親の自由で放任主義の養育態度、コンビニやファーストフードを頻繁に利用する母親の食ライフスタイルと関連していた。一方、大学生が「ソト食」傾向が強い場合、母親は料理もするが外食やファーストフードもよく利用する一貫性のない食ライフスタイルをとる傾向と関連していた。以上より食ライフスタイルは、父親・母親との関係性や母親の養育態度さらには大学生の幸福感とも関連していることが示唆されたといえよう。

全体的考察

本研究では、大学生とその母親という親子間の食事行動と食意識を、食ライフスタイルとい

う観点から明らかにし、その食ライフスタイルが両者の親子関係とどのように関連しているかを検討することを目的とした。最初に、食意識および食行動尺度から抽出された「健康的食事」「料理関心」「コンビニエンス」「家族と食事」「菓子と市販惣菜」の5因子が、親子間でどのように類似しているかを相関係数を求めて検討した。その結果、5つの下位尺度間全てで有意な正の相関係数が両者間で得られた。母親自身が健康的食事をしていると考えているほど、子どもである大学生も健康的食事をしているという意識をもつ傾向が強く、それに対し母親がファーストフードおよび菓子や市販の惣菜を食べていると考えているほど、子どももそうした食品をとっていることとらえる傾向が強いことが示された。この結果から、同一の家族内にある大学生の子どもと母親は食意識・食行動が類似していると考えられた。なぜ、親子の食行動・食意識は類似するのだろうか。子どもは小さい頃から母親が作る料理や外で購入してきた惣菜を食べて育っていく。したがって母親のとする食行動を自然な形で学習していくため食行動や食意識が似てくることが考えられる。また Scaglioni, Salvioni & Galimberti (2008) が指摘するように、幼少期に家庭で食べる食品や料理の味つけが子どもの味覚を決定づけるために、両者の食べ物への嗜好が似てくるために、食行動も似てくると考えられる。

次に、母親と子どもの食ライフスタイルを明らかにした。両者ともに、「理想的食」「ソト食」「食無関心」という食ライフスタイルは共通していたが、大学生は「ウチ食」、母親は「食きまぐれ」という食ライフスタイルが抽出された。ウチ食ライフスタイルとは、家庭において野菜など栄養バランスを考えた健康的食事をするが、料理を作ることへの関心は低い傾向の群である。「食きまぐれ」は、料理もするが外食もし、忙しい時には市販の惣菜も積極的に利用する現代の母親の食ライフスタイルを示しているといえよう。

最後にこれらの食ライフスタイルと親子関係・養育態度および幸福感との関連をコレスポネンデンス分析によって検討した。その結果、「大学生理想的食」「母親理想的食」「父親信頼」「母

親信頼」「バランス養育」「幸福最高」とが近い布置に、「大学生食無関心」「母親食無関心」「父親と対立」「母親と対立」「幸福最低」とが近くに布置された。すなわち、母子ともに健康的でバランスの良い食事を家族で一緒にとる食ライフスタイルは、父母への信頼感と関連し、その場合の母親の養育態度はバランスがとれており、大学生の幸福感も高いことが示された。その一方、母親が食べることに関心が低い家庭では、子どもも食事に対して無関心であり、親とわかりあえず対立する関係性が推察された。コレスポネン分析の布置の結果から、2世代ともに良好な食ライフスタイルをとっている場合、親子関係は良好であり子どもの幸福感は高い。逆に食への関心が低く良好でない食ライフスタイルをとる親子の関係性は、不良であり幸福感は低いという仮説は支持されたといえよう。さらに母親が料理を作る日もあるが、作るのが面倒な日は市販の惣菜やファーストフードを多用する一貫性のない気ままな食ライフスタイルをとっている場合、子どもはファーストフードや外食が多く、親を信頼しつつもイライラして対立意識も強いアンビバレントな感情をいだく傾向と関連することが示唆されていた。そしてこの場合、母親は厳しく統制的な養育態度をとる傾向があると推察された。また子どものやりたいことを自由にさせ、関わりが少ない態度をとる母親を持つ大学生は、親に対してのかかわりが希薄であることが示唆された。そしてこの場合の母親の食ライフスタイルはファーストフードやコンビニをよく利用する「ソト食」と近い関係性にあった。「自由・放任養育態度」をとる母親は、自分自身も外食やファーストフードをよく利用する傾向にある。その結果、家族がそれぞれ好きな時間に好きなものを1人で食べるために、親子の関わりも少なくなり親子関係が希薄になっているのかもしれない。本研究より、母親がとる食意識や食行動は2世代にわたって継承されていくこと、そして食ライフスタイルは、親への信頼感あるいは嫌悪感とも関連し、大学生の幸福感とも関連していることが示唆された。現代は、お金さえ出せば惣菜やファーストフードを簡単に手に入れられる時代である。しかし食への関心が高くない、気まま

な食ライフスタイルをとる母親と大学生の子どもとの関係は良好でないことが明らかになっている。したがって幼児をもつ親たちに、本研究結果と日々の食生活の大切さを提言していくことができれば、本研究の意義も大きいといえよう。

最後に本研究の問題点と今後の課題について述べる。1点目は大学生の性別の観点から分析を実施しなかった問題である。本研究では、大学生の食意識と食行動項目について性差の検討を行ったところ、有意な性差が全ての項目で見られなかったことから、親子関係の分析も男女込にして進めた。これはコレスポネン分析によって大学生と母親の食ライフスタイルと父子関係・母子関係の関係性を布置図によって示すことを本研究では目指したためであった。親子関係は親子の性別によってかわりが異なることも予想されるため、親子の性別を考慮した分析を実施することを今後の課題としたい。2点目は、本研究の目的は、食ライフスタイル、親子関係、母親の養育態度そして大学生の幸福感がどのように関連しているかを明らかにすることであった。したがって食ライフスタイルが親子関係に影響を与えているのか、親子関係が食ライフスタイルに影響を与えているのかといった因果関係は分析していないため、こうした因果関係について明らかにすることも今後の研究課題としていきたい。

引用文献

- 鮑戸 弘 (1992). 食文化の国際比較 東京：日本経済新聞社。
- 安藤嘉奈子・山田瑞穂 (2004). 過去の食卓状況が現在の食行動に及ぼす影響について：母親の養育態度や食事作りの態度との関連を中心に 共立女子大学家政学部紀要, 50, 103-114.
- Baumrind, D. (1973). The development of instrumental competence through socialization. *Minnesota Symposia on Child Psychology*, 7, 3-46.
- Boutelle, K. N., Fulkerson, J. A., Neumark-Sztainer, D., Story, M. & French, S. A. (2007). Fast food for family meals: relationships with parent and adolescent food intake, home food availability and weight status. *Public Health Nutrition*, 10,

- 16-23.
- Fulkerson, J. A., Neumark-Sztainer, D., & Story, M. (2006). Adolescent and parent views of family meals. *Journal of the American Dietetic Association*, 106, 526-532.
- 藤原章司・宮本賢作 (2010). 児童期の「食育」が成人後の食生活に及ぼす効果 小児保健研究, 69, 23-30.
- 平井滋野・岡本裕子 (2003). 食事場面の会話と親子の心理的結合性の関連 青年心理学研究, 15, 33-49.
- 平井滋野・岡本裕子 (2006). 家庭における過去の食事場面と大学生の父親および母親との心理的結合性の関連 日本家政学会誌, 57, 71-79.
- 井上朋美・宮崎圭子 (2013). 家族共食が個人に与える心理社会的機能の検討: 尺度作成および家族関係との検討 跡見学園女子大学文学紀要, 8, 185-194.
- 伊東暁子・竹内美香・鈴木昌夫 (2004). 青年期の食行動と親子関係に関する試行的研究 ヒューマンサイエンスレサーチ, 13, 167-184.
- 伊東暁子・竹内美香・鈴木昌夫 (2007). 幼少期の食事経験が青年期の食習慣および親子関係に及ぼす影響 健康心理学研究, 20, 21-31.
- 井関利明 (1979) ライフスタイル概念とライフスタイル分析の展開 村田昭治・井関利明・川勝久 (編). ライフスタイル全書 (pp.3-41) 東京: ダイヤモンド社.
- 嘉手納 悟・今井 章・嶋崎 裕志 (2004). 女子学生における親子関係と摂食障害傾向 健康心理学研究, 17, 32-41.
- 河野理恵・渋谷昌三・小野寺敦子・西川千登世 (2012). 食ライフスタイルに関する研究 (13): 中年者における食ライフスタイル尺度及び食ライフスタイルの検討 日本心理学会第76回大会発表論文集, 273.
- 小林 盾 (2011). ライフスタイルにおける社会的格差: 食生活の外注化を事例として アジア太平洋研究, 36, 235-242.
- Neumark-Sztainer D, Wall M, Story M, Fulkerson JA. (2004). Are family meal patterns associated with disordered eating behaviors among adolescents? *Journal of Adolescent Health*, 35, 350-359.
- Scaglioni, S., Salvioni, M., & Galimberti, C. (2008). Influence of parental attitudes in the development of children eating behavior. *British Journal of Nutrition*, 99, 22-25.
- 塩谷幸子 (2002). 食文化の継承と世代間関係: 正月料理の変化を通して 日本家政学会誌, 3, 157-168.
- 鈴木公啓 (2014). 新しいシルエット図による若年女性のボディイメージと身体意識の関連についての再検討 社会心理学研究, 30, 45-56.
- 高野裕治・野内 類・高野春香・小嶋明子・佐藤真一 (2009). 大学生の食生活スタイル: 精神的健康及び食行動異常との関連 心理学研究, 80, 321-329.
- 田崎慎治 (2007). 大学生における瘦身願望と主観的健康感および食行動との関連 健康心理学研究, 20, 56-63.
- Ventura, A.K., & Birch, L. L. (2008). Does parenting affect children's eating and weight status? *International Journal of Behavioral Nutrition and Physical Activity*, 5-15, doi:10.1186/1479-5868-5-15.
- 渡辺久子 (2000). 母子臨床と世代間伝達 東京: 金剛出版.
- 山下恵理・熊谷修・青木清 (2015). 大学生における食品摂取パターンと精神的健康度の関係 栄養学雑誌, 73, 2-7.

Dietary lifestyles of Japanese university students and their mothers in connection with their relationships

Atsuko Onodera

Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Rie Kawano

Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2019 vol.15

[Abstract]

The purpose of this study was to clarify the relationships between two generations' dietary lifestyles (university students and their mothers) and their parent-child relationships, child-rearing attitudes and feelings of happiness. 223 pairs of university students and their mothers living together were analyzed. First, factor analysis was conducted on "eating behavior and food consciousness" items and we found five factors: "healthy diet" "cooking interest" "convenience" "family dining" "confectionery and commercial prepared food." A result of correlation analysis found that both mothers and children showed the similar tendency in eating consciousness and behaviors. Next, cluster analyses based on five factors resulted in four dietary lifestyles patterns: "ideal diet" "eating -out" "indifference to meals" (these dietary lifestyles patterns were common for two generations) and "meals at home" pattern (only in children) and "capricious diet" pattern (only in mother). Then, the multiple correspondence analysis showed that "mothers' and children's ideal dietary lifestyles" "trust in fathers" "trust in mothers" "mother's balanced child-rearing attitude" "the highest score for happiness" were found nearby each other.

keywords : university students' dietary lifestyle, parent- child relationship,
mothers' child-rearing attitude, multiple correspondence analysis, happiness